

はじめに

二〇二一年一〇月にポーランドのワルシャワで開かれた第一八回シヨパン国際ピアノコンクール。マルタ・アルゲリッチ、マウリツィオ・ポリーニ、クリスチャン・ツイメルマンなど名ピアニストを世に送り、世界三大コンクール（あと二つはチャイコフスキー国際コンクールとエリザベート王妃国際音楽コンクール）の中でももつとも権威のある登竜門として知られている。

三週間にわたる審査の結果、優勝は中国系カナダ人のブルース・シャオユー・リウ、第二位は、日本の反田恭平そりたきょうへいとイタリア人スロベニアのアレクサンダー・ガジェヴ。スペインのマルティン・ガルシア・ガルシアが第三位、前回ファイナリストの小林愛実あいみもポールのヤクブ・クシュリツクと同率で第四位に入った。

日本は二〇〇五年せきもとししょうへいに関本昌平たかしと山本貴志が第四位に入ってから、二大会連続で入賞者



会場の国立ワルシャワ・フィルハーモニー。最後の演奏者ブルース・リウは舞台に戻ってきて、オーケストラに拍手した。著者撮影。

を出していなかった。今回は、優勝こそお預けになったものの、反田恭平が、国際的名声を誇る内田光子（現・英国籍）以来五一年ぶりの二位ということで、歴代優勝者からも祝福のコメントが入るなど、大変な盛り上がりとなった。

このコンクール、本来は五年に一度（オリンピッククより間遠だ）のはずが、新型コロナウイルス感染症拡大のため一年延期になり、しかも四月に予定されていた予備予選も七月に延期になった。

応募総数は史上最多の五〇二名。二〇二〇年に行われたDVD審査で一六四名の合格者が発表されていたが、実際に参加したのは一

五一名だった。六月に入ってポーランドで感染者が増大し、ワルシャワ入りしてから一週間隔離を要すると発表され、すでに飛行機を手配していたコンテストたちはパニックに陥った。これは特別措置が認められることになり、参加者の約半数の七八名が合格。主要コンクールの上位入賞者九名を含む八七名（うち日本人一四名）が秋の本大会への出場を認められた。

本大会では隔離の心配こそなかったものの、事前にワクチン接種とPCR検査が義務づけられており、乗り継ぎの空港でもチェックがあり、ワルシャワにたどりつけるかどうかすらさだかではなく、出場者たちの心痛は如何ばかりであったかと推察する。

しかし、蓋を開けてみると、準備期間が十分にあったためか、かつてない完成度とレベルの高さで、稀に見る激戦のコンクールとなった。

予選が三ステップあり、一次、二次と進むにつれて半数に絞られていく。第一次予選ではどうしても半数にできず、四五名（うち日本人八名）が通過することになった。結果発表で審査員長のカタジーナ・ポポヴァ「ズイドロンが憔悴しきった表情で現れ、これほどすばらしいピアニストたちにサヨナラを言わなければならないとは、としきりに謝って

いた。

それでも、オーケストラとの共演の関係から本選では規定どおり一〇人にするのだろうと思っていたら、一〇位と一一位が同点で、どうせならキリの良いところだと、ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団の了解を得た上で一二人が協奏曲を弾くという、前代未聞の事態が起きたのである。

本選の審査にも長い時間を要した。全演奏が終了したのが二〇日の二一時四五分ごろ。結果発表は翌日の午前二時を過ぎていたと思う。NIFC（フレデリック・シヨパン研究所）のシユクレネル所長の説明によれば、規定どおり順位点で投票したところ二位が三名出てしまったらしい。討議の末、投票方法を変えてようやく順位はついたものの、二位と四位が二名ずつ、五位がイタリアのレオノーラ・アルメリーニ、六位がカナダのJJ・ジュン・リ・ブイト、ファイナリストのうち八名がプライズウイナーとなり、残りの四名にはやや残酷な結果となった。

第一八回シヨパン・コンクールの出場者たちは、レヴェルが高い上に個性派ぞろいで、

既存の価値観をもくつがえすような演奏があいついだ。なかでも、優勝したブルース・リウが三次予選で弾いた『ラ・チ・ダレム（モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』の「お手をどうぞ」による）変奏曲』は、審査員たちによって「歴史的名演」と賞賛された。